

【連載：「私の好きなこの一曲」 Vol.1】

チャイコフスキー交響曲第6番『悲愴』

一般社団法人日本オーディオ協会

会長 小川 理子

皆様、明けましておめでとうございます。

旧年中は日本オーディオ協会に格別なるご高承を賜り、心より感謝を申し上げます。

本年は令和の世が本格的に歩み出し、東京オリンピック・パラリンピックが開催されるという記念すべき年であります。当協会も新たな気もちでよりいっそうの発展を祈念して取り組んでいく所存です。

さて、世界のイノベーションの進化は、ますます加速度を増し、私たちを取り巻く環境は不透明で厳しいものではありませんが、日本はこれまで蓄積されてきた独自のきめ細やかな感性を失わずに、人間中心で探求を続けられれば、持続可能な社会の実現に向けて可能性は無限にあると思います。

今年も、ご支援ご指導のほど、よろしくお願い申し上げます。

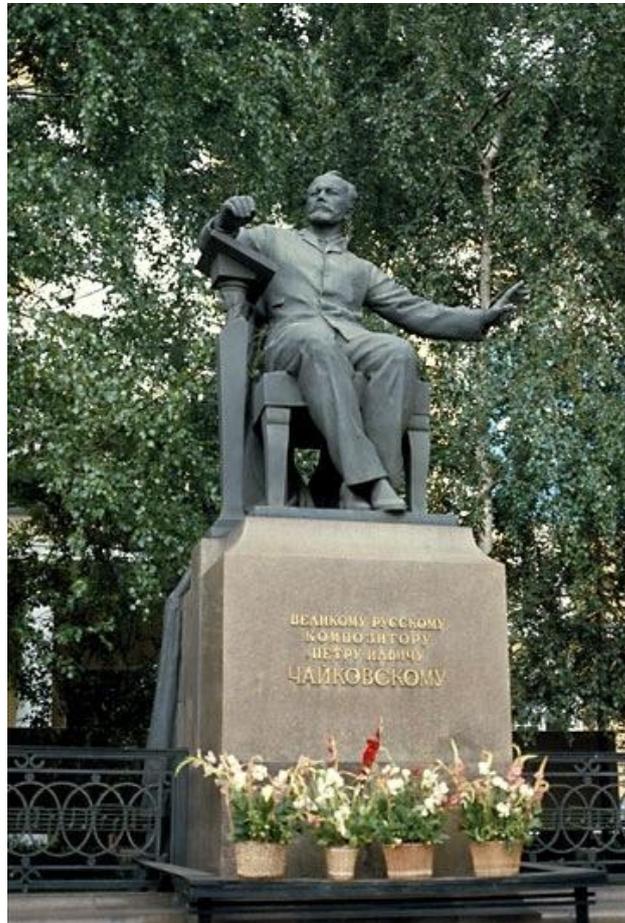
さて、令和2年となりました今月号から JAS ジャーナルでの連載は、「私の好きなこの一曲」と題して、エピソードを交えながら掲載していきます。第1回目は、幼い時から好きであったチャイコフスキーの曲です。

「私の好きなこの一曲」 チャイコフスキー交響曲第6番『悲愴』

幼い頃から音楽はいつも私の傍らにあった。母の胎内で音楽に包まれ、生まれてからも童謡を歌ってもらい、三歳からクラシックピアノを習い始めた。幼稚園の時、バレエ『白鳥の湖』を見に連れて行ってもらい、チャイコフスキーが作曲する音楽に初めて触れて感動し好きになった。ピアノのレッスンで習うバッハやモーツァルトやベートーベンやショパンやリストよりも、好きになった時期は早かった。

小学校二年生のとき、兄の家庭教師の先生と私の父が、音楽について話をしていたのを偶々耳にした。先生が父に、お好きなクラシックの曲は何ですか？と質問。父はチャイコフスキーの『悲愴』が好きだ、と答えた。その時、父はあるメロディーを口ずさみ、ここが好きなんです、と言っていた。後になってそれが第一楽章の第二主題だと知った。当時は、悲愴という言葉も知らず、意味もわからなかったが、私の好きなチャイコフスキーが話題になっていたのも、ヒソウ、という曲名だけを心に刻み、後日、父にヒソウを聴きたいと言ってみた。すると家にあるレコード全集から一枚を取り出して聴かせてくれた。印象的な主題が次から次へと出てきて、まるで映画でも見ているような時間の流れを感じる長い曲だったが、全く飽きることはなかった。レコード全

集にはレコードと共に詳しい解説書がついていた。チャイコフスキーの生涯とともに、楽章ごとに曲想や聴きどころ、主題の楽譜や奏される楽器なども書かれており、読み物としても楽しかった。何度も何度も聴いて心の芯に届いた気がした。



その全集は作曲家ごとに一巻ずつにまとめられレコードも何枚か入っていたので、チャイコフスキーのピアノ協奏曲やバイオリン協奏曲にも同時に出逢い、独特の切ない美しさに胸がしめつけられるような感動を体験した。

中学、高校と大きくなるにつれ、コンサートホールで生のオーケストラを聴く回数も増えた。私の通った大阪市立愛日小学校はフェスティバルホールのすぐ近くにあり、朝比奈隆さん指揮の大阪フィルにも親しんだ。

大学時代にクロスオーバーのサークルでジャズバンドを編成、入社後配属された音響研究所は音楽好きが集まっており上司もジャズドラマーであったのがきっかけで、ジャズを本格的に演奏するようになった。1997年、父の古希のお祝いに、父に捧げるブルースをクラシックジャズスタイルで作曲した。翌年のソロ活動5周年を記念して開催したソロコンサートに父を招待し、その曲を初披露したが、エンディングには父が昔口ずさんだ悲愴の第一楽章第二主題を即興で入れた。わかってくれたかどうかは、もう知る由もない。

2015年夏、父がこの世を去った直後の欧州出張で飛行機内から初めてオーロラを見たが、チャイコフスキーが生まれたロシア上空だった。『悲愴』の音魂が私の全身に流れた。我が人生において最も永く寄り添い続けている一曲かもしれない。